ハルビン市近郊農村におけるカンを中心とする戸建住宅の空間構成と住まい方

—中国東北部の北方居住様式に関する調査研究

HOUSE PLAN AND LIFE STYLE OF FARM-HOUSE WITH KANG IN HAERBIN —Study on the northern living and house design in northeast China

野口孝博 — * 1 月舘敏栄 — * 2
西村伸也 — * 3 森下 満 — * 4
池上重康 — * 5 岡本浩一 — * 6
陸 偉 — * 7 鄒 広 天 — * 8
周 燕 珉 — * 9

Takahiro NOGUCHI — * 1 Toshiei TSUKIDATE — * 2
Shinya NISHIMURA — * 3 Mitsuru MORISHITA — * 4
Shigeyasu IKEGAMI — * 5 Koichi OKAMOTO — * 6
Wei LU — * 7 Guangtian ZOU — * 8
Yanmin ZHOU — * 9

キーワード：
中国東北部, ハルビン, 農村住宅, カン, ペチカ, 北方居住様式, 空間構成

Keywords:
Northeast China, Haerbin, Farmhouse, Kang, Pechka, Northern living and house design, House plan

We are continuing to study on the northern life style and housing design in Northeast China. We researched the living way and house plan of 25 farm houses in Haerbin city in 2001 (Dalian in 2000). Some characteristics of this paper are as follows. 1) People have an original living style and house design with Kang in Haerbin. 2) They use pechka or radiator together with Kang as heating system. 3) The house design is very characteristic in northern region but is different from it of Dalian. 4) We can find the northern traditional character in their life style but its life style gradually changes to modern style.

1. はじめに

遼寧省、黒竜江省などの中国東北地方にはカンを中心とする独特の居住様式が営まれている。筆者らの研究グループは、中国北方の居住様式の実態と変化の動向を調査・追跡するとともに、今後の北方圏における住宅・住環境計画のあり方について検証する作業を継続して行っている(注1)。調査対象地域は、大連市(2000年12月調査)、ハルビン市(2001年8月と2002年2月調査)、瀋陽市(2002年9月調査)の3都市で、調査実施年はそれぞれ前に示したとおりである。それぞれの地域において各都市近郊の典型的な農村集落を対象とした農村住宅調査と市内の典型的な集合住宅団地を対象にした都市集合住宅調査の二通りの住宅・住まい方調査を行った。調査戸数は、農村で10数戸から20数戸、これは主として戸建て住宅である。また集合住宅は中高層の集合住宅で5~7階建またはそれ以上で、各都市20数戸から30戸程度の規模の調査を行った。

農村戸建て住宅調査と都市集合住宅調査を平行して進めているのは、一般的な農村住宅において、カンを利用した独特の北方型住生活様式の実態を確認し、その特性を把握するのが主目的とするが、それに加えて、近代的な住宅計画の考え方がおおむね用いられている集合住宅においてそうした住生活様式の影響の有無と変容の過程を追跡し、その変容のメカニズムを探ることを目的としている。すなわち北方の住様式の特性と原理をより明瞭にとらえるためである。

これらの実態調査報告は、2001年、2002年の日本建築学会大会、支部および技術報告集などで順次行っている(注2)。このうち農村住宅については、前報の大連の農村住宅実態調査報告(注3)に

つづいて、本報ではハルビン市近郊農村の事例について実態を報告する。3都市の比較検討は、調査がまだ完全に終了していないために行うことはできないが、今回は大連市との比較検討を一部試みる。

ハルビン市では、都心から数十kmのところにある近郊農村紅星村と白石村の2カ所において住宅調査を行った。両村とも住戸数数十戸程度の小村で、同じ集落形態、階層構成を形成している(以下2村の資料は一体に扱う)。それぞれ10数戸ずつ、併せて25戸の住宅調査を実施した。調査対象の選定に当たっては、地元の大学研究室と村長など村の役人などのアドバイスをもとに、住宅規模、建築年などを加味して村の平均像を得られるように配慮した。この25戸を対象に住宅の間取り採取、住まい方の観察、居住者への聴取調査を行い、併せて両村の集落調査を実施した。これらの資料を中心に、ハルビン市近郊農村における伝統的、典型的な居住様式の実態と特性およびその近代化の状況について報告する。ハルビン市は北緯46度に位置し、大陸性気候で冬は外気温がマイナス30度にも達する厳寒地域である。大連市よりも冬期の温度はかなり低い。積雪はそれほどでなく、一冬を通して30~40cm程度である。調査は2001年8月に北海道大学、新潟大学、八戸工業大学、ハルビン工業大学、大連理工大学および北京清華大学の合同で実施した。また2002年1月に同様に冬の生活状況の把握のために冬期住宅調査を実施した。

中国東北地方の住様式に関連する研究は、前報で示したとおりである。全体として北方の住様式という観点から検討しているものは筆者らの研究を除いて少ないこと、特に近年の住様式の変化の傾向とそのメカニズムまでを検討しようとするものはほとんど見られな

*1 北海道大学大学院工学研究科 助教授・工博
(〒060-8628 札幌市北区北13条西8丁目)

*2 八戸工業大学 教授・工博

*3 新潟大学工学部 教授・工博

*4 北海道大学大学院工学研究科 助手

*5 北海道大学大学院工学研究科 助手・工修

*6 北海道大学大学院工学研究科 博士後期課程・工博

*7 大連理工大学設計研究所 教授・工博

*8 ハルビン工業大学建築学院 教授・工博

*9 清華大学建築学院 助教授・工博

*1 Assoc. Prof., Graduate School of Eng., Hokkaido University, Dr. Eng.

*2 Prof., Dept. of Architecture, Hachinohe Institute of Technology, Dr. Eng.

*3 Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Niigata University, Dr. Eng.

*4 Assistant, Graduate School of Eng., Hokkaido University

*5 Assistant, Graduate School of Eng., Hokkaido University, M. Eng.

*6 Graduate School of Eng., Hokkaido University, Dr. Eng.

*7 Prof., Dalian Institute of Technology, Dr. Eng.

*8 Prof., Haerbin Institute of Technology, Dr. Eng.

*9 Assoc. Prof., School of Architecture, Tsinghua University, Dr. Eng.

表1 ハルビン市近郊農村住宅の世帯構成・住宅・平面構成・住まい

	家族構成	住宅										暖房の種類		はきかえ		臥室の使われ方			カンの上の生活					
		建築年	住宅面積 (注1) (㎡)	室・ 庁 数 (注2) (室)	最大室 庁面積	最大室・庁用 途	部屋配列 パターン	臥室分割有無 (注3)	小カンの有無 (注4)	平面型	カンの位置 (注5)	カン	ベチカ	その他 (ラジエーター・ ストーブ)	家族	家族以外 (注6)	就寝	接客	だんらん	就寝	応接	T V	食 事	家 事 (注7)
01	夫婦	91	45.0	3	14.4	親臥室	3列型	×	×	3列北カン型	N	O ₁	O ₁	O ₂	×	×	○		○			○	○	O _w
02	夫婦+娘	87	36.7	2	16.3	親臥室	2列変形	×	×	2列変形北カン型	N	O ₂	O ₂		○	×	○			○		○		
03	親・若夫婦+子	93	54.0	2	19.2	親臥室	3列型	○	×	3列北カン型	N	O ₂			○	×	○		○	○	○		○	
04	夫婦+子2	99	67.0	4	17.3	客庁	3列型	○	O ₁	3列南北カン型	N,S	O ₂			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
05	夫婦+子2	83	47.6	4	13.7	客庁	2列型	○	O ₁	2列北カン型	N	O ₂	O ₁		×	×	○	○	○	○	○	○	○	
06	夫婦+子	95	35.3	2	21.4	親臥室	2列型	×	×	2列北カン型	N	O ₁	O ₁		×	×	○	○	○	○	○	○	○	○
07	老+親+子2	00	36.3	3	10.9	親臥室	2列型	○	×	2列北カン型	N	O ₁		O ₁	○	○	○							
08	夫婦+子2	71	42.0	3	14.3	子臥室	3列型	×	×	3列北カン型	N	O ₂		O ₁	○	○	○	○	○	○			○	
09	夫婦+子	91	35.6	3	14.0	親臥室	3列型	×	O ₁	3列南北カン型	N,S	O ₂		O ₁	×	×	○			○				○
10	親・若夫婦+子	90	67.3	3	35.3	親臥室	3列型	×	×	3列北カン型	N	O ₂	O ₁		×	×	○	○	○	○	○			
11	夫婦	01	48.5	3	20.0	親臥室	3列型	×	×	3列北カン型	N	O ₁	O ₁		○	×	○	○	○	○	○	○	○	O _w
12	夫婦+子	66	35.0	2	17.3	親臥室	2列型	×	×	2列南北カン型	N,S	O ₂			×	×	○	○	○	○			○	○
13	夫婦+子2	00	54.0	4	13.5	親臥室	3列型	○	O ₁	3列北カン型	N	O ₂		O ₁	○	×	○	○	○	○		○	○	
14	夫婦+子3	97	54.0	4	9.3	客庁	3列型	○	O ₂	3列北カン型	N	O ₂		O ₁	○	○	○	○	○	○		○	○	
15	親・若夫婦	92	62.4	6	12.8	客庁	3列変形	○	O ₃	3列変形北カン型	N	O ₃		O ₁	○	○	○			○			○	O _w
16	老+親・若夫婦	91	54.0	3	21.9	親臥室	3列型	○	O ₁	3列北カン型	N	O ₂		O ₁	○	○	○	○	○	○	○			
17	夫婦+子2	98	64.9	4	15.8	親臥室	3列型	○	O ₁	3列北カン型	N	O ₂		O ₂	○	○	○	○	○	○				
18	夫婦+子2	70年代	62.6	3	20.5	親臥室	3列型	×	×	3列南カン型	S	O ₂			×	×	○	○	○	○	○			
19	夫婦+子	00	69.0	5	16.6	親臥室	3列型	○	O ₂	3列北カン型	N	O ₄			○	○	○	○	○	○	○			
20	夫婦+子2	76	48.5	3	16.8	庁(厨房)	3列型	×	×	3列南カン型	S	O ₂			×	×	○	○	○	○	○			
21	夫婦+子2	97	55.3	3	17.1	親臥室	3列型	×	×	3列北カン型	N	O ₂		O ₁	○	○	○	○	○	○				
22	夫婦+子3	1870代	114.5	5	24.6	親臥室	3列型	○	O ₁	3列南北カン型	N,S	O ₂			×	×	○	○	○	○	○			
23	親・若夫婦+子	68	51.9	3	17.5	庁(厨房)	3列型	×	×	3列南カン型	S	O ₂		O ₁	×	×	○	○	○	○	○	○	○	
24	親・若夫婦+子	86	62.0	3	20.7	庁(厨房)	3列型	×	×	3列南カン型	S	O ₂		O ₁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	O _w
25	夫婦	81	40.0	2	19.7	親臥室	2列型	×	×	2列南カン型	S	O ₁		O ₁	×	×	○	○	○	○	○	○	○	○

注1) 有効内法面積 (大きな倉庫は除く)
注2) 臥室、客庁、方庁の数 注3) 間仕切で臥室を小室化 注4) 10㎡以下のカン室、数字は室数 注5) Nは北側、Sは南側 注6) ○×は場
合によりはきかえ 注7) O_wは冬に行う

注1) 有効内法面積 (大きな倉庫は除く)
 台によりはきかえ 注7) O_wは冬に行う

注2) 臥室、客庁、方庁の数 注3) 間仕切で臥室を小室化

注4) 10㎡以下のカン室、数字は室数

注5) Nは北側、Sは南側 注6) ○×は場

い。大連につづいてハルビンの調査研究は、より寒冷な地域でのカンの住様式の実態と特性、またその近代化の状況を扱うもので、筆者らの一連の調査研究を発展させたものである。なお、本調査研究は2000~2002年文部科学省科学研究費補助金（基盤B海外学術調査）で実施したものである。

2. 住宅調査と農村戸建て住宅の概要

対象になった住宅の建築年はこの地域での伝統的な形式を残す1960年代のものから最近の傾向を示す2000年代の新築住宅まで分布している。すなわちハルビン地域において典型的に見られるカンの形式と住空間構成をもつ住宅が中心になっている一方で、最近の新しい傾向を見るのにふさわしい住宅群が含まれている。

住宅規模は有効内法面積で30㎡代から110㎡代まで含まれる。規模の分布域は広いが、中心は40~60㎡程度である。全体として平屋建てで小さめの住宅が多く、住宅規模の平均は54㎡になる。この値は、ハルビン市周辺の農村住宅の平均的な値である。大連の農村住宅（注4、都市近郊で大型の新築住宅が多かった）よりは小さな値になっている。家族構成は3~5人が中心で、「夫婦」また「夫婦+子」の単純家族世帯が全体の3/4を占めている（表1）。農村部ではあるが、2世帯以上の同居世帯は意外に少ない。また子供の数は、一人っ子政策の影響は受けない。このため子供が2人ないしは3人のふつ

う規模世帯が概して多いのが目立つ。

3. 平面構成と住宅型

住宅平面の基本は、庁を中心に両側に室（臥室）が並ぶ3列構成が主流である（表1、図1参照）。中央に厨房を兼ねる庁をおき、そのカマドの熱を利用して両側のカンを暖める空間構成の原理は大連の場合とおおむね同じである。しかしハルビンでは極寒の気候に対応するために暖房（カン）室をより小さくする傾向がある。保温のためである。通常の臥室を分割して小さなカン室と客厅にしたり（10戸/25戸、表1、図1P4参照）、はじめから小さなカン室を確保するなどの例が比較的多い。通常はカンのある部屋（臥室）は15~20㎡程度はあるのであるが、小さなカン室の場合にはその半分か1/3程度にまで縮小している。ここでは10㎡未満の部屋を小カン室としてカウントした。そうすると調査対象住宅25戸のうち10戸がそうした小カン室を1ないしは2室有する例であった。中には小さなカン室を横に3室並べるような住宅もあった。

カンの位置についてみると1960年代~80年代の住宅では、住宅の南側にある例が多い（図1・P1、P2、図2）。80年代までの住宅11戸のうち南カンタイプは5戸、南北タイプを含めると住宅の南側にカンのある例は7戸になる。これに対して北側にカンのある北カン型は3戸にすぎない。特に1970年以前の住宅では北カン型は皆無である。

図1. ハルビン農村住宅典型事例（平面構成、型、住まい方）

つまり伝統的には住宅の南側にカンのあるのがふつうであったと言えよう。

そのカンの位置が動いている。すなわち近年は、居住者が南の出入り口側に厨房があるのを嫌い（人に汚れたところを見られるのをいやがる）、北側に移動させる例がふえている（図1・P3、P4）。実際にカンが北側に配置される例は16戸と全体の半数以上を占める。

特に1990年以降では、全体で15戸のうち13戸が北カン型である。南カン型は一つもない。残りの2戸は南北カン型である。このような北側カンは厨房位置の移動と結び付いている。厨房の移動つまりカマドの移動にともなってカンも必然的に北側に移るのである。その場合、庁は途中に間仕切りが入って方庁と厨房に分かれる例が多い（P1、P4）。厨房をより独立した性格の部屋として扱うのである。その分厨房内に他人の視線が入るのを避けることができる。

寒さ対策として一つの臥室に二つのカンを有する例（P1）が、今回の調査で4戸ほど含まれているのも特徴である。二つのカンはたいてい部屋の南と北側に配置される。カマドの位置と煙突の位置の関係から外壁側に沿ってカンは配置されやすいのである。つまりこれらは南北カン型に当たる。居住者のヒヤリングによるとこのような1室2カン型が以前は多かったようである。小さな臥室ではカンの占める面積が大きくなる。小カン室はもとより、こうした1室2カンタイプの場合でも、それだけ室内における暖房放射面積の比率が高くなる。寒冷地に適した方式と言える。

部屋の配列について見ると、より規模の小さな住宅では2列構成が多い。今回の調査でも6例ほど見られた。いずれも住宅面積が50㎡以下の小住宅である（表1、図2）。空間構成としては庁の両側の臥室のうち一つを欠く形であるが、そのために小規模な家族しか対応できない。一方50㎡以上の場合にはほとんどが3列構成である。北方の住様式として中央に熱の供給源となる庁（厨房）を、その両側に熱を利用して生活を営む居室を配するのは合理的な意味をもっている。その原理を原則的に維持している住宅が多いのが、ハルビン地域の農村住宅の特徴と言える。ただし3列構成の場合でも、現状の生活をきちんと営むうえでは部屋数が少なく（大連に比べても少ない）就寝分離が日本とは同じようには進んでいない状況も一部にうかがえる。

図2 住宅面積、建築年と平面形の分布

4. ハルビン地方の防寒対策と暖房方式

ハルビンでは、住宅の構造はレンガ造が主である。一般的にレンガの外壁は長手二枚積みでふつうである。壁厚は490mmで統一されている。冬期最低気温がマイナス30℃の日が続くハルビンでもレンガ以外に特に断熱材は使用していない。開口部は比較的小さめである。まず出入り口は幅約800mmの一枚扉で、たいてい住宅の出入り口は1カ所に集約されている。また窓はすべて腰高形式のため全体の開口率は小さい。窓の下には、通常カンまたはラジエータが付く形になっており、コールドドラフト対策が原則的に実施されている。窓は二重窓である。単板ガラスの木製サッシがレンガ壁の外側と内側に設置されている。つまりサッシとサッシの間は50cm近くあることになり、対流の防止という点からは望ましくはないであろう。実際にそこには植木鉢などいろいろなもの置かれる。なお、内側のガラスは夏には外している家が多い。外したガラスは部屋の隅などに置かれる。冬の前にまたそれをはめるのである。防寒対策の主役はカンである。カンも前述したように1室2カン型があるほか、1住宅で複数のカンを使っている例が圧倒的に多い。二つ以上のカンを備えている例は25戸中20戸を占める。中には3カ所又は4カ所のカンを使っている住宅もある。その場合にはカンの部屋を10㎡以下という極端に小さくした小カンタイプが主である。

カンのほかにペチカやボイラーによるラジエータを併用している例が多いのが注目される。カンとペチカ併用例は6戸/25戸、カンとラジエータ併用例は13戸/25戸、またカンとペチカ、ラジエータの三者併用例も1戸/25戸ある。同じ燃料を使ってもカンよりペチカの方が放熱温度は高いため、部屋を暖めるのに有効と考えられている。また近年増えている簡易ボイラーとラジエータによる暖房方式は、熱効率、暖房のしやすさの点などで居住者には評価されている。

ペチカは比較的古い住宅に多い（図1・P3）。やはり厨房に焚き口があって、主に石炭を燃料にしている。壁面温度はカンよりも高い。一方ラジエータ方式は新しい家に多い。厨房ないしは専用のスペースにボイラーを置いて、沸かした湯を給湯管で各臥室の窓下に置かれたラジエータに送るようになっている。ボイラーは、非常に簡単な構造である。鉄製のカマドに水の入っている鉄管を通し、石炭などを燃やして直接その鉄管を暖める仕組みになっている。温水の循環にはポンプは使わない自然循環方式である。新しい家では臥室のほかに方庁や厨房などにもラジエータが設置され、完全集中方式になっている例もある。このようにペチカやラジエータはもっぱら日中の室温維持に使われている。

5. カンと臥室の使われ方

標準的な大きさのカンは、幅3.0m前後、奥行き1.8m前後の長方形をしている。ふつう外壁側に長方形のうちの2辺を、内壁（カマド）側に1辺を接しており、したがって他の1辺から上り下りする形になる。カンの床上部分の面積は4.5～6.0㎡程度で、臥室の面積の1/4～1/3程度を占める。結構広いスペースなのである。

カンは単なる暖房設備ではない。床より60～70cmほど高いプラットホーム型の形状のために、接客時の椅子になったり、靴を脱いで家族のだんらん、テレビ、家事（座って編み物、裁縫）、食事など、いろいろなことに利用されている。カンが就寝に利用される割合は今回調査では100%、すべての家で利用されている。それに次いで応

接（13戸/25戸）、テレビ・だんらん（15戸/25戸）、家事（15戸/25戸）利用の比率が高い。接客に使われるのは当然で、そこは腰掛けてお茶を飲んだりおしゃべりをするのはちょうどよい場所である。筆者らも訪問時に最初にカンに通されることが多かった。カンの縁に座って、同じようにカンの縁に座っている家の人から話を聞く場面が少なくなかった。食事の場としては主に冬使われている。暖かい場所でゆっくりくつろぎながら食事をするのは、北国の特徴とも言える。またカンのうえでギョウザをつくるのもユニークである。ヒヤリング調査によると、春節のときなどに家族そろってカンの上でギョウザをつくるのは、東北地方で伝統的に行われる家庭行事である。また多くの家で新年の行事に限らず客があるときにはよく作るそうで、その場合カンの上に（縁の方に寄せて）麺板と呼ばれる40cm×60cm程度の大きさの板を置いてその回りに人が3、4人で囲んでおしゃべりをしながらギョウザ作りをするのが一般的なやり方である。

これらのことから分かるように、カンのある臥室は、就寝、接客、だんらん、余暇など非常に多目的なことに使われる多用途空間であることが分かる。就寝のみに使われている例は今回の調査では4戸のみである（表1）。これらの臥室は主に小さな小カンタイプの場合である。このように中国東北地方において暖房様式と不可分の独特の性格をもった住様式が見られることは注目される。

6. 床面様式と履き替え

近年室内の、とくに臥室部分の床をきちんと張る家が増えている。床が張られるようになると同時に、住宅内での靴の履き替えが進んでいる（表1）。床材としてはフローリングが主流である。起居庁、臥室などがきれいなフローリング仕上げになり、居住者はその床の保護や衛生、掃除の手間のことなどを考慮して、日常的に靴を履き替える習慣が出始めているのである。ただ農村住宅では、都市部の集合住宅のように履き替え習慣が完全に定着する段階にはまだ至っていないことも事実である。農村住宅で履き替えをおおむね日常的にしている住宅は、14戸/25戸ある。しかしこのうち場合によっては履き替えをしないときもあるという家が2戸あり、履き替えが定着している家は約半数である。しかし、家族以外の客など（特に大勢）の場合には、履き替えないという家が多いのは注目される。客の場合でも完全に履き替えをしている例は6戸のみと少ない。これらの住宅は、いずれも1990年代以降の新築住宅の例である。筆者らも住宅を訪問したときにほとんどの場合そのまま中に入るように勧められた。しかし我々の目から見ていかにもきれいで清潔な床仕上げになっている場合にはやはり靴のまま室内に入るのは躊躇された。

すなわち現代農村住宅において常時履き替えをする家の割合は約半分ということで、依然として半分はまだ土足のままである。その場合唯一靴を脱いで裸足になれる場所がカンの上なのである。裸足になってカンの上で過ごす、その気持ち良さを訴える居住者は多い。原則として土足（また靴を履いて）の生活様式が基盤になっている中で、裸足で営める生活の場が適度な広さと割合で組み込まれていることは注目される。そこは言わば半床座式の生活空間であり、暖房と一体になったユニークな場所である。既に見たようにカンのうえで就寝、だんらん、接客、家事作業、また種々の余暇遊びなどを

したりすることからも分かるように、カンは言わば北方の人たちの重要な生活装置なのである。このようなカンの使い方と臥室の性格に特徴のある伝統的な住様式は農村に限らず、都市集合住宅の住み方にも少なからず影響していることは事実である（注5）。

7. まとめ

ハルビン近郊農村における農家住宅平面は中央に庁のある3列構成が主となっている。この平面構成原理は、最新の新築住宅の場合を除けば前稿で報告した大連の場合とおおむね同じである。しかし大連の場合に比べて臥室が小部屋に分割する傾向が見られる。すなわちカン室がカンだけで部屋の大半を占めるような小カン室になるケースが多いのである。これは暖房効率を優先した結果と考えることができる。

一方住宅内のカンの位置が近年移動する傾向がみられる。つまりカンの位置は厨房の位置移動にともなって従来の南側から北側に移っている。すなわち現在は北側カンが主流になっている。カンの移動にともない部屋の性格が変わり、平面構成にも変化が生じている。単純な3列構成から住宅平面は少しずつ複雑化していることも事実である。またカンの他にベチカやラジエータの併用例が多いのも特徴で、それに応じた独特のプランが見られる。ボイラーとラジエータの普及にともないカンを廃止する例もある。しかしカンと臥室を中心とする生活はまだゆたかに営まれており北方の特色も濃い。総じて大連の場合に比べて東北地方の住様式の伝統性が維持されている様子がうかがえる。

2000年の大連調査、2001年のハルビン調査につづいて2002年には瀋陽調査が予定されている。瀋陽は、緯度の上で大連とハルビンの中間に位置し、防寒対策や寒冷地の住様式の面でも大連とハルビンの中間的な性格が見られることなどが筆者らの共同研究グループのこれまでの予備的な調査・検証作業からもうかがうことができる。今後これら3都市の調査結果を集約し、それらを総合的に検討することにより、北方型居住様式の特性と空間原理の解明のための正確な検証作業を行い、同時に新しい北方系の住宅計画理論の体系化に向けた作業に継続させる予定である。

注

注1) 本調査研究は、2000～2002年文部科学省科学研究費補助金の助成を得て、中国東北地方の3都市（大連市、瀋陽市、ハルビン市）の都市、農村両住宅を対象にして北方型住様式の実態を把握するために、日中の大学が共同で行っているものである。参加大学は、日本側北海道大学、新潟大学、八戸工業大学、中国側大連理工大学、瀋陽工業大学、瀋陽建築工程大学、ハルビン工業大学、清華大学の8大学である。

注2) 文献3)、4)、5)、6)、7)、8)、9)

注3) 文献10)

注4) 文献10)

注5) 文献8)、9)

参考文献

- 1) 西村伸也、野口孝博、陸緯他、「中国東北地方（大連、瀋陽）における居住空間と住まい方に関する研究—と部屋の構成・住まい方について」、日本建築学会大会学術講演梗概集、49-50 1994
- 2) 西村伸也、野口孝博、陸緯他、「中国東北地方におけるカンのある住居に関する研究その2—現代住居に残されるの住まい方」、日本建築学会大会学術講演梗概集、313-314、1995
- 3) 常広陽子、野口孝博、西村伸也、月舘敏栄他、「庁を中心にみた住空間構成の変化について—大連を中心とする中国東北地方の住宅・住様式に関する調査研究(1)」、日本建築学会北海道支部研究報告集NO.74、223-226、2001
- 4) 岡本浩一、野口孝博、西村伸也、月舘敏栄他、「都市集合住宅における床面様式と上下足履き替えについて—大連を中心とする中国東北地方の住宅・住様式に関する調査研究 (3)」、日本建築学会北海道支部研究報告集NO.74、231-134、2001
- 5) 野口孝博、月舘敏栄、西村伸也他、「庁を中心にみた住空間構成の変化について—大連を中心とする中国東北地方の住宅・住様式に関する研究(1)」、日本建築学会大会学術講演梗概集、539-540、2001
- 6) 山下義行他、野口孝博、月舘敏栄、西村伸也他、「農村住宅におけるカンの様式と住まい方—大連を中心とする中国東北地方の住宅・住様式に関する研究(2)」、日本建築学会大会学術講演梗概集、541-542、2001
- 7) 月舘敏栄、野口孝博、西村伸也、森下満、池上重康、岡本浩一、「中国東北地区ハルビン市近郊の農村集落における北方系居住文化に関する調査」、日本建築学会技術報告集No.16、239-242、2002
- 8) 岡本浩一、野口孝博、西村伸也、月舘敏栄、森下満、池上重康、「大連市都市集合住宅の清浄感からみた居住様式と空間構成—中国北方居住様式に関する研究」、日本建築学会技術報告集No.16、207-212、2002
- 9) 山下義行、野口孝博、西村伸也、月舘敏栄、森下満、池上重康、岡本浩一、「大連・ハルビン市における都市集合住宅の空間構成と居住様式—中国北方居住様式の近代化に関する研究」、日本建築学会技術報告集No.16、213-216、2002
- 10) 野口孝博、月舘敏栄、西村伸也、森下満、池上重康、岡本浩一、陸偉、周燕ミン、「大連市における農村戸建て住宅の空間構成と住まい方の変化—カンを中心とする中国北方居住様式に関する研究」、日本建築学会技術報告集No.17、2003（2002年9月採用済み）

[2002年10月18日原稿受理 2003年2月25日採用決定]